

# 「森の恵みを生かす暮らしー ー“普段使いの里山”を手に入れよう」

◆2016年11月19日(土)、香川県高松市のサンポートホール高松第2小ホールであった「国民参加の森林づくり」シンポジウム～にぎわい再び里山に～のうちパネルディスカッション約1時間30分の全記録PDF版です。森林文化協会編集発行の月刊誌「グリーン・パワー」2017年1月号6～7ページの記事の詳報となります。

## ▽コーディネーター

香川大学名誉教授 増田 拓朗

## ▽パネリスト

株式会社グリーンマム代表 川畑 理子

半農半X研究所代表 塩見 直紀

香川県環境森林部みどり整備課長 松下 芳樹

(敬称略)

## 《目次》

I : パネリスト各氏の話提供 (各 12 分)	…… 2 分
II : コーディネーター・パネリスト間の質疑応答	…… 15 分
III : 会場の参加者からの質問を受けて	…… 20 分
IV : まとめ	…… 27 分

○司会：お待たせいたしました。これより、パネルディスカッション「森の恵みを生かす暮らし——“普段使いの里山”を手に入れよう」を始めます。コーディネーター、パネリストの皆さま、どうぞご登場ください。

それではご紹介します。コーディネーターは香川大学名誉教授の増田拓朗さんです。

○増田：よろしくお願ひいたします。

○司会：パネリストは、ステージ左から順に、株式会社グリーンمام代表の川畑理子さん、続いて半農半 X 研究所代表の塩見直紀さん、そして香川県環境森林部みどり整備課長の松下芳樹さんです。皆さまの詳しいご経歴などはプログラムをご覧ください。

質問用紙は、3 人のパネリストの皆さんから話題提供をいただいた後、スタッフが回り、回収いたします。時間の関係でお答えできる数は限られますが、ご質問のある方は話題提供を聞きながらご記入をお願いいたします。

それでは増田先生、進行をよろしくお願ひいたします。

## I：パネリスト各氏の話提供



○増田：それでは、私の方で進行させていただきます。

田部井さんの最後のビデオメッセージ（※編集部注：朝日新聞デジタルにダイジェスト版がアップされています。URLは次頁に）を拝見いたしまして、皆さんもまだ感動冷めやらないところだと思うんですけども、世界的な登山家の田部井さんが、今日のメッセージを見ますと、日本の山々の美しさと里山の恵みは世界に誇る遺産であることをこのシンポジウムでも改めて皆で確認し合いたいと、こういうメッセージを寄せてくださっておられました

ので、この田部井さんの言葉をかみしめながらパネルディスカッションを進めていければと思います。よろしくお願ひいたします。

パネルディスカッションのテーマは「森の恵みを生かす暮らし——“普段使いの里山”を手に入れよう」となっておりますが、先ほどの知事さんの基調報告にもございましたように、かつては、私なんか子どものころですけども、人々が里山に親しく入り、接し、利用していた。それが高度経済成長以降ですか、燃料革命あるいは肥料革命で人々が里山に入らなくなった。人々の管理がおろそかになり、森林の持つ多面的な機能が失われてきた。その結

## 里山の状況、ライフスタイルが影響

果、地域の環境の変化ですとか、あるいは、ちょっとした雨が降ると土砂災害が頻発するとか、さらには野生生物の生育状況、そういったところにも大きな影響が出てきている。

こういう里山の状況の変化というのは、実は、私たち都市に住んでいる人間のライフスタイルといいますか、そんなことも大きく影響している。日々の生活のありようをもう一度考えていくことが必要ではないかということで、このテーマ、「森の恵みを生かす暮らし」と。生活者の視点から里山というのをもう一度考えてみたいということでございます。

今日は、里山あるいは森の恵みを暮らしの中に生かす、そういった活動をされておられます 3 人の方をパネリストにお迎えしております。お話を伺いし、また質疑応答する中でこの問題について考えてみたいと思います。

本日の進行ですけれども、まず 3 人のパネリストの方々それぞれ 12 分ずつぐらい話題提供をいただきまして、その後、質疑応答・討論に入りたいと思います。

パネリストの皆さまへお願いですが、一人 12 分ということですので。残り 1 分になりますとスタッフの方が、あと 1 分ということで黄色い札を上げますので、進行にご協力をいただければと思います。

それから会場の皆さまへのお願いでございますが、ただ今司会者の方からご案内がありましたように、3 人の話題提供が終わりました段階でスタッフの方が会場の質問用紙を回収にまいりますので、記入されました方はお渡しください。大体 10 分を目処に回収させていただきます。ただ、今日は時間が限られておりますので、その間もこちらの方で質疑応答は進めさせていただきますので、この点をご了承ください。

それでは早速ですけれども話題提供をお願いしたいと思いますが、まず川畑さんから。他の発表者の方は客席の方でご覧になっていただければと思います。それではよろしく願いいたします。

※編集部注：故田部井淳子さんビデオメッセージ朝日新聞デジタルURLは次の通り。

<http://www.asahi.com/articles/ASJCP67GGJCPPLBJ004.html>

## 話題提供 1：株式会社グリーンマム代表・川畑理子氏



○川畑：初めまして。グリーンマムという会社を営しております川畑理子と申します。よろしくお願いいたします。

今日、田部井さんのお話を伺いまして。私も10歳まで三重県の海と山に囲まれた田舎町で育ちました。父が林業を営んでいる関係で本当に山は親しく、3姉妹なんですけれども週末は半分我が家のように山小屋で遊んだりとしていたもので、今は東京で子育てをしておりますけれども、今でも毎週末、子どもを森のような公園に連れて行ったりとか、富士山も6合目まで一緒に子どもたちと登ったりとか、そういうことをしたことがあるんですけれども。

最後に田部井さんが、里山の美しさとか森の美しさということをおっしゃっていたんですけれども、今はなかなか、森を手入れしたりとか里山を手入れしたりということまで手が及ばなくなってしまうのが日本の現状でありますので、それを私の会社では、都市部でどんどん森の恵みである木材を使うことによってそれを循環させる、使って植える。使うことによってまたそこで経済が循環するように、地域に還元できるように、森に還元できるようにしたいという思いから、都市部のいろんな企業に対して、国産材・地域材を使うことを提案するような仕事をしております。それを少しご紹介させていただきたいと思います。

事業内容ですけれども、私どもの会社は、国産材・地域材と呼ばれるものと認証材の利用をさまざまな業界に対して提案し、利用促進、地域と都市をつなぐことで、地域産業の活性化と、最終的には、今衰退しかけておりますけれども林業の再生を目指しています。

世界規模で見ると、地球上では、ここに時間が入るんですけれども、何分か何秒か何日か何時間かに、サッカー場一つ分の大きさの森がなくなっています。これ、何分か何秒か予想して、どなたがいらっしゃいませんか。1時間にとか1年にとか。ちょっと手が上がらないので、では。これ、実は1秒間なんですね。たったこの1秒間に、世界規模で見るとサッカー場一つ分の森がなくなっています。

それはなぜかと申しますと、途上国で起きております違法伐採をはじめとした、違法に木材を切ってそれを先進国に、日本もそうですけれども、全てが違法伐採材とはもちろん申しませんけれども、輸入して使う消費者がいるからこういう現状になっているわけです。日本は国土の7割、67%が森林ですので、違法伐採材なども含めた輸入材を使わずに国産材・地域材を使って、利用の数が多い都市部でもっと使っていかうという取り組みをしております。

弊社の役割ですけれども、発注者であります企業、それから林業地域の林業家さんですと

## 国産材・地域材の利用、都市で増やす

か製材所、木に関わる仕事の方がいらっしやいまして、設計、デザインなどをする施工会社の間に入って、どのような地域材や国産材を使っていくかというような提案をしております。

三つの大きな大切なことを感じているんですけれども、一つはまず、どうして地域材や国産材を使ってほしいのかということを知ってもらう。それから、使ってもらう。最後にはできれば山の現状ですとかも、例えば今日のテーマですと里山の様子などを、来てもらってさらに使うことへの思い入れを深めてもらって使ってもらうというような、継続的な利用の繰り返しによって、最終的には里山ですとか地域に木材の利用をとおして経済効果をもたらせればと思っただけ利用促進しております。

例えばどんなふうに使われているかと申しますと、ほぼ非住宅。住宅ではないオフィスですとかカフェなどの店舗に使われているんですけれども、最初は子どものおもちゃを作り出して、その後こういった都市部の空間の中に木を多く使ってもらっています。

こちらのスープストックトーキョーという、スープを提供している小さなレストランですけれども、こちらは2010年に出会ってから、ほぼ外材を使っていたのを国産材に切り替えていただいて、最初は内装材だけだったのが、小物ですとかそういったものに切り替えてくださっています。

こちらのデザインの担当者だった方はつい1年ぐらい前に会社を辞めて、それこそ里山の管理じゃないですけど、支援じゃないですけど、滋賀県に移り住んで、滋賀県の高島市の再生のために力を尽くしているという方もいらっしやる、そういった流れもつくってきました。

こういった内装材に使いましたら、どうしてこういう思いで使っているのかとか、どういうところから来ているかということ、さらにここに来るお客さまに知っていただくような工夫もしております。照明の使い方なんかも、右側は、昔でしたら日本の家屋の柱に使われているようなものを、LED電球を埋め込んでこういったかたちで使ってみたりとか、新しい木材の利用の仕方をデザイナーさんと一緒に考えて使っていただいています。

こちらの壁は大阪でつくったレストランですけれども、内装材には、製材所でB級品と呼ばれているちょっと曲がった木なんかを積み重ねて、おしゃれな壁を作り上げました。これも、例えば地域で製材所を営んでいる方なんかは、材木屋さんも含め、こんなものは使えないだろうというようなものがたくさんあるんですけれども、それを都市部に持っていき、デザイナーさんたちの力によって魅力的な商品に生まれ変わるという。

それで多くのお客さまたちに木の良さ、木の空間での居心地の良さを体感してもらえんということと一緒に提案してきました。

これは岩手県の上りのフローリングなんですけれども、こちらにも傷が付いてしまっているということでもなかなか外に出ることがなかったんですけれども、非住宅であれば傷が付

いていても、土足で入るところであれば特に問題ないということで、今までたまっていたものを商品として販売することができました。

弊社は2009年に最初は国産材のおもちゃを作ろうと思って始めた会社で、そのうち内装関係も始めたんですけれども、おもちゃのほうでは、2011年3月に「どうぶつしょうぎ」という将棋を幻冬舎さんという出版社と一緒に発売したんですけれども、これはおもちゃ界で100年に一度の大ヒットと呼ばれる33万個、今は累計で50万個売れたおもちゃがあるんですけれども、それはあまりに中国産がたくさん売れたので、ぜひ国産材で作って贈答品用にいいものを提供したいというご相談を受けまして、一緒に国産材で作りました。これは2012年に林野庁長官賞をいただきました。

木材と申しまして、幹だけではなくて葉っぱですとか枝ですとか、そういったものも有効利用するために、ANIMI（アニミ）という名前でヒノキオイルを作りました。これは、この間の5月に三重県で行われましたサミットで、各国の首脳たちがお泊まりになるお部屋にも置いていただいたりと、三重県ブランドとして認定していただいております。

それから、都市部の子どもたちが通う塾というか教室のようなところにも積極的に提案して、こういった木のテーブルですとか椅子を作らせていただいています。

それから、アクリル材と呼ばれます、虫がいったん食った跡があってもなかなか使われにくいと言われる材料があるんですけれども、そういったものをどうにか使ってもらえないかという相談を受けまして、このへんですね、それをわざと虫が食った跡を塗装して見せることによって、お店全体がちょっとクラシックな感じになるような雰囲気を出しました。全体がこんな感じですね。

これは東京の原宿にあります洋服のお店ですけれども、外の壁に、表面上プレーナー加工してないというのが。つるつるになるような加工をしていないスギ材を外側の壁面にずっと貼ったんですけれども、これもなかなか製材所の方に、つるつるにしてない状態で出すとクレームが怖いとか、そういうことを言われるんですけれども、そのへんをうまくご理解いただきながらこういった雰囲気のお店を仕上げました。内装も全部、上はヒノキの柱ですとか、階段のところもヒノキを使っていただいています。

それからドコモショップですね。ドコモショップは9割以上のお店が決まった内装になっているんですけれども、東京の木場店はもともと木が集まる場所ですので、できれば木を使いたいということで、初めての試みで内装材として木を使っていただきました。この時に、NTTドコモさんが南三陸町を東北支援ということで特に力を入れて応援してらっしゃいましたので、南三陸町の木材を使わないかというようなご提案をして、南三陸町のスギでこちらは木場店と、それから水戸店もつくらせていただきました。

それから、最近はずっとお付き合いのあるスープストックトーキョーさんのシンガポールの3店舗、それから去年は無印良品さんが香港に出した際にも使っていただきました。

これは三重県にあります伊勢神宮の隣の猿田彦神社さんですけれども、こちら全改装

を行う際に三重県産の尾鷲ヒノキを使っていたきました。

それからキッズスペースとして、どうしてもおもちゃで始まった会社ですので、できるだけ子どもに対しても木に触れあって、それから木の大切さとか木の心地良さとかというのを小さい時から体験してほしいと私も思っておりますので、こうしたキッズスペースも最近やらせていただいております、イオンの中にあるキッズスペース、こんなものをつくりました。

これはここが人気過ぎて、1時間、2時間しても子どもたちが、ただ走っているだけなのに、大変人気過ぎてお母さんたちがここにしかいられないって、逆に苦情がくるぐらい人気のスペースになったと聞いております。

こういった流れで、今までになかったような木材の使い方都市部の人たちに木の使い方を提案して、地域の人たちにもそれに合った商品を作っていただけるようなご相談をするというかたちでやっております。以上です。

○増田：どうもありがとうございました。また後で質疑応答をよろしく願いいたします。それでは続きまして塩見さん、お願いいたします。

## 話題提供 2：半農半 X 研究所代表・塩見直紀氏



○塩見：皆さん、こんにちは。「半農半 X」という生き方を提唱しています塩見直紀と申します。今日、半農半 X という言葉を初めて聞かれた方がおられましたら大変嬉しく思います。

今、スクリーンでご覧いただいておりますのは、京都府綾部市の私が住んでおります村の真言宗のお寺の下で撮った X の形をした木の枝です。半農半 X を 20 年間、提唱してきていますので、私は何を見ても X に見えてしまいます (笑)。

私は 1965 年生まれで、2000 年より「半農半 X 研究所」という 1 人研究所をしています。その他の肩書としては、総務省地域力創造アドバイザー、この春から福知山公立大学地域経営学部の特任教員をしています。いま、京都府内で 4 つのスクール (スモールビジネス女性起業塾、綾部ローカルビジネスデザインスクール、半農半 X デザインスクール、コンセプトスクール) をおこなっていて、地方で自分の仕事を創っていける若い世代を応援する仕事をしています。15 年間ほど、「里山ねっと・あやべ」という NPO 法人のスタッフとして、里山的生活の魅力を発信、都市農村交流などの企画を



したりもしていました。

今秋、「じぶん資源とまち資源の見つけ方」というミニブックを作りました。市民（県民）それぞれが持っている特技や可能性、夢といった「自分資源」と、まちや村の「地域資源」を見つけて、それを掛け算、クロスさせていって、何か新しいことを始めましょうというコンセプトの書き込み式のワークブックです。今回のテーマ「森の恵みを生かす暮らしー“普段使いの里山”を手に入れよう」とあうのではないかと思います。

私は2003年に「半農半Xという生き方」という本を出させていただきました。まったく無名の者が書いたのですが、輪がひろがり、台湾人の若い方が本を手に取り、台湾に伝えたいと、台湾の出版社に持ち込んでくださり、台湾版（「半農半X的生活」）が出たのが2006年、ちょうど10年前となります。台湾の編集者によって、「自然に従順で、与えられた天賦の才能を実践する（順従自然、実践天賦）」という副題が添えられました。こういった方向に生きれば、人としては自然の理（ことわり）を踏み外さない。本ではそんなメッセージができたと思っています。台湾版が中国大陸にもたらされ、2014年に中国版（簡体字）が出ました。環境問題、食品安全、水や土、大気の汚染など、いろんなことを中国も抱えているのではと思います。中国の方が拙著を読まれて、綾部まで訪ねて来てくださる時代が来ています。

私は里山といわれる地に暮らしながら、自給農、家族のための自給農をおこなっています。今はちょうど柚子がなって、里山の恵みをいただいています。

農作業をするときは、胸のポケットにはペンと紙を入れておきまして、作業中にひらめきをたくさん得ますのでそれを書き留めて、また自分のミッション、Xに役立てています。

私は田んぼ（3反）を仲間と手植えして、除草機を押し、無農薬ですので、手での田の草取りにはげみ、手刈り、天日干しをしています。地元の山の高さは350メートルぐらいで、川もなく、先人がつくってくれたため池で米づくりをしています。そういう意味では香川と似た地ではないかなと思っています。

綾部市は人口が約33000人で、人口は減少中です。綾部で有名なのはゲンゼ、大本教、あと合気道の発祥の地とか、限界集落の取り組みも有名です。綾部は「平和、里山」、「人生探求（こころのまち）」、「ものづくり（一部上場企業が2社が創業）」が「綾部の型」ではないかと思っています。香川の皆さまがお住まいの地はどんな特徴がありますでしょうか？

私は綾部を「人生探求都市」にしたいと思っています。旅する若い人たちが綾部にやってきて、そのヒントを提供できる町です。未来の香川について語りますと、若い人たちが香川にやってきて、里山的な生活のヒントを提供できるメッカとなればいいんじゃないかなと思っています。

今、世界は台風前の接近中に似ているかなと思っています。黒い雲がたちこめ、北極星も見え



ないし、灯台の灯りも見えない。船の羅針盤も壊れているような、それが現代ではないかなと思っています。こんな時代をどう生きるか、25年ほど前からこんなことを考えてまいりました。そして、たどり着いたのが半農半Xという考え方です。

半農半Xが生まれたきっかけは2つあります。1つは、大学卒業後、入社した会社で出会った地球環境問題です。環境問題を考えるなかで、農的なことをする必要はないかなと思いました。専業農家になる自信がはない。でも、農0%はまずいんじゃないか。そんなことを思うようになったのです。きっかけの2つ目は、自分に与えられた役割は何か、自分の生きる意味は何か、これを同じ20代に考えたことです。私はそれを天職問題と名づけています。環境問題と天職問題という2つの大きな問題があり、20代の終わりの頃、私の中に「半農半X」という言葉が生まれました。同じころ、「里山」というキーワードも知り、自分がそういった里山の地で生まれたことを思い出し、33歳で故郷にUターンすることになります。

半農半Xは、もともとは半農半漁という日本の伝統的な暮らしがあったから生まれた発想です。調べてみると、すでに大正15年には作家・島崎藤村が「半農半画家」という言葉を使って、小説「嵐」を書いていたりと、宮沢賢治も「半農半商」「半農半工」とか講演で使っています。半農半Xは20年前に生まれた言葉ですが、武士も暇な時は農業をする（半農半士）し、お医者さんも心ある人は農業もしていました（半農半医）。

「X」というのは、天職、使命、天命、生きがい、ライフワーク、大好きなこと、得意なことを指します。Xというアルファベットは2つの棒（バー）がクロスしています。1つは自分で、もう1本は他者、社会、自然をあらわしていると考えます。無縁の時代には、「関係性」とか「間」とか、そういったものがとても大事なキーワードになると思っています。

今日はいくつかの穴埋め問題を作ってみました。皆さんなら半農半（ ）、（ ）の中は何を入れられるでしょうか。今日は若い方も参加されておられますし、田部井さんのファンの方、山登りが好きな方もおられると思います。家で家庭菜園をされている方で百名山を目指している方、自治会活動で子どもたちの見守りとかをされている方もあるかと思いますが、短歌が好きな方、陶芸が好きな方、それぞれあるかと思いますが、皆さんの独自の半農半（ ）の空欄を埋めていただけたらうれしいです。

私は半農半X研究所という1人研究所を2000年からやっています、1人1研究所をみんながやるような時代をつくっていきたくと思っています。皆さんなら、（ ）研究所の中の括弧に何を入れられますか。何でもいいんですね。シカ研究所でもいいし、ツキノワグマ研究所でもいいし、家庭菜園研究所でもいいし、引きこもりの子どもたちを助ける研究所でもいいし、テーマは福祉でもまちづくりでもいいと思います。

里山は「生命多様性」の空間です。私はそのことばをもじって、「使命多様性」というキーワードを15年ほど前につくりました。「生命多様性」では表現できない世界があるんじゃないかなと思い、「使命多様性」と名づけたのです。植物にも動物にも昆虫にもそれぞれ役割が何かあると思っています。「森、里山」と皆さんが持ってらっしゃるXという「何か」

を掛け算すれば、「！」(ビックリマーク)、何か新しいものが生まれるのではないかと思います。

「森の恵みを生かす暮らし」「“普段使いの里山”」を手に入れるために、大事だと思う3つのキーワードを挙げてみたいと思います。1つは、アメリカの科学者レイチェル・カーソンが50年ほど前に言っている言葉、「センス・オブ・ワンダー」です。センス・オブ・ワンダーとは、「自然の神秘さや不思議さに目を見張る感性」で、それがとても重要じゃないかということです。子どもたちはそれを持って生まれているけども、だんだん失うので、周囲の大人はなくさないようにしてほしいとカーソンはメッセージしました。2つ目は、「新しい組み合わせ」を里山で、香川でつくっていくことが重要だということです。旅人とおばあさん、アーティストと子どもとかです。登山家の田部井さんは高校生と富士山登山をされました。そういう先人、先輩が持つ知恵、リスペクトできるものと若い感性が掛け算されていくことがとても重要じゃないかなと思います。「世界を変える魔法は組み合わせの中にこそある」。これは脳科学者の茂木健一郎さんのことばです。「世界を変える魔法」というのは今、なかなか無いようです。でも、唯一、希望があるとしたら、新しい組み合わせを香川の中で、それから日本でいっぱいつくっていくことが重要です。

アイデアとは何か。いろんな本を読んでみて、結論は何かというと、アイデアというのは「既存のものの組み合わせ」ということです。新しいアイデアが里山や森というものの中から生まれていけば、うれしいです。「アイデアは交差点から生まれる」といいます。今日もこのシンポジウムが1つの交差点になり、新しい何かが生まれたらと思います。

キリスト教の思想家・内村鑑三は明治27年、「我々は何をこの世に残して逝こうか。金か、事業か、思想か」と講演をしました。次の世代に何とか良き遺産を私もバトンタッチしていきたいなと思っています。

最後に1枚、写真をお見せして終わりたいと思います。これは台湾の海岸で見つけたX模様の入った石です。日本は宝物がいっぱいです。宝物を発見できる感受性、感性というのはとても重要ではないかなと思っています。私はこんな写真を今2000枚ぐらい撮っていて、目標は1万枚です。1万枚撮れば世界の第一人者になれるんじゃないでしょうか。

こういったくだらないものも、積み上げていけば何か世界一になれるんじゃないか、宝物の発見能力が高まるのではないかと思います。皆さんも今日からぜひ地域のいいところ探し、X探しをしていただけたらと思います。どうもありがとうございました。

○増田：どうもありがとうございました。また後で質疑応答をよろしくお願いします。

それでは松下さん、お願いいたします。

### 話題提供 3：香川県環境森林部みどり整備課長・松下芳樹氏

○松下：お二方とも例えば木とか農の世界から、たぶん個人の立場でどう関わっていくかというお話だったと思いますが、私の方からは、行政の立場ということもありますので、森とどう関わるかというテーマを受けて、個人の方々が、普段使いの里山を手に入れたい時に、手に入れやすくするような仕組みというものがあった方がいいんじゃないかと、そのような社会装置と言えるようなものとして香川県でやっている取り組みのどんぐり銀行を題材にお話をさせていただきたいなと思います。



まず最初に、香川県の森林・林業の概要なんですけど、既に1枚の裏表で香川県の概要の資料も配付されていますし、最初の知事の宣言の時にも説明がありましたので具体的な説明は省きますが、全国的に見ても、森が少ないということになっています。樹種の構成も、広葉樹が6割ぐらいあって、マツは14%ぐらいありますが、マツも雑木林化していますから、ほとんど8割が雑木林となっていて、林業の中心であるスギ・ヒノキは14~15%というところですから林業県ではないんですね。

それを他の地域と比較して見ると、岐阜県の高山市は日本一広い市町村なんですけど、そこは全部、香川県より数字が大きい。四国3県と比べてみても、既に県レベルでは他県が全部大きいんですけども、人工林のスギ・ヒノキ面積にいたっては3県のいくつかの市町村と同じぐらいということで、実は非常に林業的にも規模が小さい県なんです。

本県のみどりの基本計画の内容はどうなっているかという、先ほど説明がありましたように、やっぱり守っていくのが基本で、でも守るだけでなく森林資源を有効に活用しようと、林業もできるだけ地域循環としてやっていこうじゃないかと、最後に、暮らしの中で森と関わっていこうということを基本的な考え方にしています。

また、この計画の目標の中に、みどり豊かな暮らしをつくるという表現がありますが、たいていの他の都道府県の森林の計画は、こんな森をつくりましょうということを目指していることが多いと思いますが、本県のみどりの基本計画では、「緑がたっぷりの暮らしをつくりましょう」ということになっています。これは、さっきも言ったような四つの基本的な考え方があって、より暮らしに近いところに森があるということもあるので、総合的に森を使う、暮らしと密接な使い方をしようということなんです。

つまり、森を守り、利用するその先に何を實現していくのかを考えていこうよ、みたいなコンセプトです。

もう一度、県土全体を見ると、東西は80キロぐらいしかないです。南北は山から海まで

## 暮らしの近くに森があるのは幸せ

が30キロぐらいしかないんです。ということはどういうことかという、人が住んでいるところから30キロぐらいのところに全ての森がある。

こういうところなので、先ほど森が少ないと言ったんですが、実は小さい県で森が少ないということはそんなに悪いことじゃないんじゃないかと。もっと積極的に考えると、実は暮らしの近くに森があるのは大変幸せなことじゃないかと。最近コンパクトシティとよく言われますが、そういう言葉を借りると、香川県はコンパクトフォレストなんだと。小さくてもぎっしり詰まっていて、身近に効率的に使える森があるんだという考え方もできるんじゃないかと思います。

そこで、森とどうやって関わっていくかということについて、どんぐり銀行がやっている活動をご紹介します。

どんぐり銀行は、森に近づいて親しくなろうというコンセプトから始まっています。最近広葉樹が増えてどんぐりはどこでも拾えるんですが、やっぱりコロッと落ちていると思わず拾ってしまう。小さい子どもたちには人で、とにかく拾ってしまう。そうしたら、それをお金として預金してもらったら楽しいんじゃない？ということで、集めてきたら預金通帳に入金してもらえるとというシステムなんです。

香川県で拾えるどんぐりというのは少ないものまで含めると15種類ぐらいあるんですが、大体8種類か7種類ぐらいが主なもので、大きいものが1個10ドングリ(D)、小さいのが1個1ドングリで、持ってくると預金通帳に記入してくれる。預けられるのは10月の第1日曜日から12月の第1金曜日までなんですが、この2カ月間というのは、自然の造幣局が稼働している間だけ受けをしましょうということなんです。

最初は利子もつけていて、月に1%、年12%だったんですが、ちょっとバブリーだということと計算が面倒くさいというので、今は1年に1度、お正月に100ドングリだけお年玉が付くというシステムになっています。

どんぐり銀行というのは預けることだけなのかというとそうではなくて、実は預金をするとその後いろんなお便りがやってくるんですね。お便りの中ではいろんなイベント、木工教室だとか、丸太切りだとか、カブトムシの森でカブトムシを捕ろうとか、森で遊ぼうとか、竹馬とか。食体験としてはどんぐりのコーヒー、どんぐりのクッキー、竹でのバームクーヘンづくりなどですね。もちろん植樹もやっているし、ハードな草刈りもありますよって、こういう行事のお知らせが年間を通じて来るんですね。

銀行ですから払戻しがあって、普通は3月に苗木をもらえるようなシステムになっています。ですから、預かったどんぐりからも苗木を育てていて、どんぐりの木に限らず、3月に預金通帳から引き落として苗木をもらうということがあります。もちろん、たくさんどんぐりが集まるので、使い切れないどんぐりは山を切り開いている砕石業者の方々が緑化に

使ってくれていて、もう随分になるので、今では大きく育っているところもあります。

払戻しは苗木だけじゃなくてグッズもあるのですが、今年の11月からはどんぐり銀行ポイント券というのを発行して、いろんな協賛店でサービスが受けられるようなこともやっています。今日もチラシが入っていますが、どんぐり銀行というのは子どもの笑顔から始まったので、まず最初の協賛店は、子どもが笑顔になる県内のケーキ屋さんが割り引いてくれるというサービスから始めています。

預金者数なんですが、これまでの累計では22,000人を超えていて、4000人近くに、4万本以上の苗木を払い戻しました。最初の頃は新規預金者数も多かったのですが、20年を過ぎるとだいぶ減ってきてまして、今年ぐらいからもう一度活性化しようという取組みをしています。

どんぐり銀行のコンセプトは、森を経済的なものとして見るのではなく、もっと森が好きの人を増やしていこうということで、それだったら、森を好きになるには子どもの頃から好きになってもらおうと。でも意外と日常生活の中で子どもたちが森とふれあう機会ってないよねと。周りに森がある田舎の子どもも、ゲームとか何とかで実際に森に足を運ぶことは少ないんじゃないかということです。だけど無理やり連れて行くようなことをしちゃうと逆効果になるから、じゃあ楽しみながら森とふれあうことから始めようということで、子ども目線で遊びから始まっています。

どんぐり銀行のシステムを分析してみると、どんぐり銀行って預金通帳を発行するシステムだけだと思っている方が多いのですが、実はその後に、さっき言ったように、預金すると突然お便りがやってきて、いろんなサービス提供が受けられるという、本当はここがメインの狙いになっているんですね。

また、活動の中にはいろいろな仕事があるのですが、ここに市民参加でボランティアの人に関わってもらうということで、市民参加システムが組み込まれています。

ということで、どんぐり銀行というのは実はいろんな主体が関わって協働でやるシステムになっていまして、こういう多重で多層なシステムになっているところが本当はミソなんです。

さらに、七つぐらい、いいところがあるんじゃないかと思っていて、一つは交換。exchangeですね。どんぐりを拾って持っていただけなんだけれど、そこで苗木にも交換してくれますが、どんぐり銀行がいいことをすると、自分がどんぐりを持っていただけで森に貢献したみたいな気になるという意味の交換が行われているとか、あと、持っていくと通帳をくれる。これは参加証とか会員証の役目をしていて、帰属意識がちょっと生まれてきたりするんですね。

もう一つは、参加機会の豊富さ。1年間にわたっていろいろな行事を提供するので、1回こっきりじゃないので、行こうかなと思った時に何らかの参加の機会があるということがミソですね。

それともう一つは、参加のしやすさ。さっき言ったように遊びから真面目なもの、ハード

なものからソフトなものまであるので、年齢とか性別とか体力に関係なく参加できる機会を提供しているというところですね。あと信頼性の高さは、行政との協働というようところで、この活動自体の信頼性が高い。

さらに、ネットワークの多様性ということで、いろんな方がお出でになるので、そこでいろんな考え方が結び付いたりして、いろんな化学反応が起こるといような場となっています。

そして最後は、やっぱり遊びなんですね。哲学的にはいろんな意味合いがあるようですが、遊びをとおして森と暮らしの関係が生まれてくる場合も多いということですね。

一般に、どうしたら個人が森とふれあうようになるんだろうと考えた時に、ある学者の説によると三つの条件があるというんですね。簡単なんですけど、参加しようと思った時に参加できる機会があるかないか。機会があっても、参加条件が自分が超えることのできるレベルかどうかということ。最後は、参加して褒められるのか、批判されるのかという評価。この三つがそろって個人は参加しやすくなると言われています。

つまり、できるだけ参加の機会を多くすることが必要なんですが、どんぐり銀行は年間を通じて行事を開催していますので、それをクリアしていて、二つ目のレベルの話は、できるだけハードルを低くすると。お金がかかったら駄目だという人もいれば、体力がいるから駄目だという人もいるので、いろんなレベルの機会を提供していけばいいということなんですけど、どんぐり銀行の場合は、そこについてもクリアできると。最後に、どう見られるかということなんですけど、これは活動自体がどう社会的な評価を受けているかということで、ここについても行政との協働ということでクリアできているということです。どんぐり銀行が受け入れられてきたというのは、実はこういう要素がいずれも満たされていることも背景にあるんじゃないかと見ています。

そういう意味で、今日のテーマの「森の恵みを生かす暮らし」ということなんですけど、暮らしと森をつなぐものとしてどんぐり銀行が一つの役割を果たしているんじゃないだろうかということです。最初に言った社会装置としてのどんぐり銀行という位置付けがあるのではないかと思います。そういう意味で皆さんにもちょっと見る目を変えていただけたらなと思っています。

最後に、皆さんもお子さんと一緒に秋のボーナスはどんぐり銀行へ預金していただきたいということで、発表を終わります。

○増田：どうもありがとうございました。

## Ⅱ：コーディネーター・パネリスト間の質疑応答

○増田：それでは質疑応答に入ろうと思いますので、パネリストの方、川畑さん、塩見さん、壇上にお戻りください。ただ今から質問用紙の回収にもスタッフが参りますので、ご記入されました方はどうぞご提出願います。こちらでは質疑応答を進めていきますが、まず私から発表者の方に1問ぐらいずつ、ひとつとお尋ねしたいと思います。

最初に川畑さんにお尋ねするんですけども、ただ今のご報告の中で、国産材・認証材の利用をさまざまな業界に提案して、利用の促進を図ると。地域と都市をつなぐ、あるいは地域の活性化、それから林業の再生を目指して取り組んでいるというお話があったんですけども、ご発表の中でもありましたけど、日本社会全体でいうとまだまだ建材とか家具とかおもちゃとかは、プラスチックとか金属、あるいは木を使うにしても安い外国産材とかが多いような気がするんですけども、国産材を川畑さんのところで取り組む時に、うたい文句というか、どんなご説明をされて利用を図っておられるか、あるいは、使ったお客さまからどんな声が届いているかというあたりをちょっとご紹介いただけたらと思います。

○川畑：うたい文句を一言で言うと、それがあれば私も知りたいぐらいなんですけれども。というのも、企業の担当者の方ですとかデザイナーからしてみると、国産材を使用したり地域材を使用したりする意義とか意味とかというのは語れば語るほど、分かっているよっていう話になっちゃうんですよね。分かっているけど、例えば価格が合わないとか、デザインがどうのとか、納期がどうのという、でもでもでも、できないよねっていう話になるので、それよりもお客さまにあたる担当者の方々が描いている商品、例えば私どもの仕事ですと内装ですとか使っていく小物ですとか、そういったものに国産材でどう対応できるかということ聞き出すようにはしています。

要は、食べ物では地産地消っていいですね。当然香川県産のものを食べたいって思うんですけども、例えば香川県産のものがすごく良くて、それに限って例えばすごく高かったり、品質が、例えばですよ、悪かったりしたら、香川県産のものを食べるのがいいと分かっているけど、横に品質も良くて割と買いやすい同じ食べ物が並んでいたら、どうしても、いいのは分かっているけど、じゃ外国産のものを買おうか、ということになっちゃうと思うんですね。

それと同じで、消費者、使ってくださる方、デザイナーさんだとか施主さんの望みに応えられるものを国産材でこちら側がどう対応できるかということ聞き出して、お客さまの意向に合ったものをできるようにコーディネートします、というのが私どもの仕事だと思っています。

○増田：実際に使われた方からどんな反応というか、使ってよかったとか、いや、この程度だと、そんな声はどうでしょうか。

○川畑：やっぱり実際にできてみると、ほとんどのお客さまが継続的に国産材を、ほとんど



## 交流の輪を広げ新しい価値生みだそう

というか本当に百パーセントですね、関わった方は基本的にはじゃ国産材で頑張っていこうと。

要は、できないと思ったものが意外とできるんだ、苦労はいろいろあるけれどもできるんだということが、一緒に頑張っていくところで喜びが変わったりとか、それが会社的にも世の中に貢献している、CSRの一環になったりということもありますし、逆にそれに関わってくださった地域の製材所とか材木屋さんたちも、都市部に合わせた生産体制を自分たちが整えていくという。両側が一緒に成長していったって貢献していくというような体制を取っているとは思って、そういう声を聞きます。

○増田：日本のためにとか、国産材を使うことがいいことだといって上からいかないで、アイデアを出して、いいものを作って使っていただいた結果が国産材だと、そういうことですかね。

○川畑：はい、そのように心掛けています。

○増田：ありがとうございます。また後で。同じような質問かもしれませんが。

続きまして塩見さん。半農半Xということで、半農の農は環境問題だと、地球環境問題に関心があって、そこから入ったということで、Xは天職、使命、生きがいと言われたんですけど、単に個人が私の人生をどう生きるか、個々人が我が道を行くというよりは、Xという、関係性ということもありましたけど、それを地域に広げるとか人の輪を広げてという、そこが重要だなともお聞きしたんですけども、それはどういうふうに使われておられるかを。

○塩見：最近、自己紹介がとても重要であると思っています。自己紹介がたくさん交わされるまち、いろんな人たちと出会って、あなたの夢は何ですかとか、趣味は何ですかということを語られるような社会をつくっていく必要があると考えています。

どうしても無縁化している世の中だと思うのです。分かりやすい例で言うと、山登りすると知らない人でも挨拶する。街中に行くと挨拶はしない。もう一度、人と人との出会いをデザインしていくことが重要です。人との「交流のデザイン」を進めていくことで、新しいアイデアとか創造性がまちにたくさん生まれていくんじゃないでしょうか。

都市は人もたくさんいて、そういったことができるかもしれませんが。私は農村に住んでいますので、農村で新しい創造性を新たにつくっていくことはなかなか難しいのですが、都市農村交流というのは交流による触発といった意味があると思います。私は「自己紹介が多いまち」をつくっていきたいなというふうに思っています。

昨夜、地元の綾部で「綾部ローカルビジネスデザイン研究会」をしておりました。毎月、研究会をおこないます。綾部の地域資源を生かして何ができるかというので、移住された方とか地元の方とかに来ていただいて、ゲストを迎えて、そこで新しい交流の輪が広がり、新しい価値が生まれたらと思います。どんぐり銀行にもそういった機能があるんじゃないかなと思います。そこで新しい関係の輪が広がっていく。本当に地道な活動なのですが、最も

重要なことですね。「どこから来ましたか？」とかだけじゃなくて、「夢は？」とか、「何が得意ですか？」とか、そういったものを知ることによって「新しい掛け算」が生まれたらいいなと思っています。

○増田：都市の今の問題で孤独死なんていうのもあるんですけど、隣は何をする人ぞみたいなところがあるんですけど、自己紹介から近所付き合い、まさに日々の生活から考え直していかうと、こういうことですか。後でまた詳しい質疑があると思いますが。

では、松下さんはどんぐり銀行の発案者で、どんぐり銀行は松下さんが考え出したというよりは、全国それぞれのところで考え出したみたいなかたちで動いている。子どもたちが森に近づく非常に大きな運動になっていると思うんですけども、お話の中で、どんぐり銀行活動を展開していく上で、行政や企業、NPO、森林所有者、その他いろんなところが連携・協働していくことが必要だと、それを通してさまざまな市民参加システムを展開してきたということだったと思うんですけども、その成果というか、あるいは課題も。困難だとかがあったと思うんですけども。

それから、今後の展望についてちょっとお話しただければと思います。

○松下：1992年からやっているんですが、1990年代というのは全国的に森林ボランティア活動がすごく盛り上がった時なんですね。香川県でのきっかけはどんぐり銀行だったということもあって、森づくりに関心のある人たちがみんなこの活動を通じて集まりました。

いわゆるプラットフォームみたいになって、そこからいろんな、それこそ塩見さんが言っているXですよ。いろんな方がそこで出会って、自分たちでグループをつくっていく動きがあったということで、時代のそういう役割を一つ果たしたのかなと思います。

それと、子どもたちを相手にしているので子どもだけが対象のようなイメージがありますが、実は、皆さん気が付くとおり、子どもが1人だけで森に行けないですよ。そうすると、おじいちゃん・おばあちゃんかお父さん・お母さんが一緒に連れて行くと。最初は子どもが行きたいってことだと思いますが、実はそのうち、はまっているのはおじいちゃん・おばあちゃんと、お父さん・お母さんというケースもたくさんあって、そういう中からまた新たなスタッフが生まれてくるというかたちで、大人の人たちにも入りやすい入口になっていたということじゃないかと思います。

課題としては、そういうできるだけ楽しい切り口でいこうということでしたから、ある意味そこから先になかなかうまく発展しづらかった点もあるのかなということがあります。もっと大人の世界と言ったらなんですけど、もう少し幅広の、遊びだけじゃない、もっと社会貢献的な意味合いも含めた、さまざまなメニューをもっと用意をして、社会装置的な意味合いで、普段の暮らしの中からちょっと興味があるねと言った時にその機会を用意して、そこから皆さんが森に入ってくるというようなかたちまで持っていけるようにするべきなんじゃないかなと今思っています。

○増田：ありがとうございます。私も森林ボランティアをかじったりするんですけど、20年ぐらい前に香川県でもものすごい盛り上がったんですね。でも10年、20年たつてふと見る

## 子ども親も木のぬくもり求めている

と、その当時関わった人が年を取ったままいて、なかなか次の世代が、少しはいるんですけど、なかなか入ってこないというような状況もあるので、今関わっている者もちょっと考えて、広げていく必要があるかなということも考えています。

発表者の皆さんの中でそれぞれまた、こんなことを聞いてみたいということも相互にあるだろうと思いますのでございましたら。

○松下：そうしたら川畑さんに。最初はおもちゃを作っていたというお話ですが、木を使うという、特に無垢材を使うってたぶん一番関心があるのは、子どもの安全・安心を気にかけているお母さんだと思うんですね。

そういう意味で、木育が今随分はやってきていますけれど、子どもと母親をターゲットにした攻め方というか、暮らしの中に木が普及していくときに、そういう木育とか、お子さんとお母さんみたいなところからの切り口というものについては、どのような可能性を見ているかという点について何かあったら教えてください。

○川畑：ご存じかと思いますが、東京の四谷という割と中心のほうに東京おもちゃ美術館というところがあるんですね。そこは廃校になった小学校の内装を全部木質化して、木のおもちゃだとか木の滑り台とかそういうものが置いてあるだけじゃなくて、それが一つのテーマパークのようになっています。そこは入館料が確か大人 700 円、赤ちゃん 0 円だったと思うんですけど、大体 7 歳ぐらいまでが楽しめる。全てが木でできていて、全国のおもちゃ作

家さんの木のおもちゃなんかも展示してあったり買えたりするんですけども、そこに何と年間 12 万人の人が訪れるんです。

それぐらい、都市部に住んでいる人というのは木の空間とかぬくもりというのが、私は田舎で育ったのでよく分かるんですけど、当たり前じゃないというか、求めている。だから年間に 12 万人の人が木の空間で子どもを遊ばせるところを求めている。私も時々行きますけど、例えばディズニーランドにその 10 倍のお金をかけて行くわけですね。大人だったら 7000 円近く払って。それと同じぐらいの時間、親が何もしなくても、座って見ただけで、子どもが安心した空間でずっと楽しそうに遊んでいる。

ディズニーランドって固有名詞を挙げちゃうとあれですけど、例えばテーマパークだと、あっちに行かなきゃいけない、こっちのジェットコースターに乗りたい、親が全部ついていく。でも木の空間だと、子どもが自分たちで、どうやって積み木を並べるかとか、あっちの空間とこっちの空間でかくれんぼしたりとか。子どもの創造力を伸ばして、それを親がニコニコ見ていられるという空間は十分、今後、都市部に住むお母さんたちもいいなって思う。木っていいんだなって思う空間。

それが、自分たちが家を建てる時に、子ども部屋だけでもせめて国産材にしようとか、ヒノキの無垢のフローリングにしようとか、そういう発想につながっていけばいいなと思う

ので、要はそういう空間がたくさんないと、行かないと知れないですね。そういう空間、例えばどんぐり銀行なんかも東京でやったら面白いかなって思ったりとか、空間だったり切り口というか、入口というか、そういうものがたくさんあるとよりいいのかなとは思いません。

○増田：他に、それぞれ。

○松下：それじゃ、今度は塩見さんに。塩見さんのXって、ミッションというかハードルが随分高そうな感じがしたんですが、私が最初に塩見さんの半Xを聞いた時には、致し方なく、嫌な仕事でも生活のためにと暮らしているXであっても、残りの半分は農とか森とかで暮らせばいいという生き方かなと思っていたんですね。そんなのもありなんではいしょうか。

○塩見：半農半Xは農もXもともに敷居を低くしています。Xですが、ベンチャーでもいいし、半農半公務員で地域再生に燃えるというのも素晴らしいと思います。半農半エンジニアとか、会社勤めでものづくり大好き、機械が大好きだという方はそれでいいと思います。

定年された方はボランティアでもいいと思いますし、Xが見当たらないという方は、周りの方を応援することをXと考えてほしいです。孫育て中の方はそれでもいいし、育児中のお母さんはお子さんのためというのでもいい。本当にXは多様です。農に関しては自分にできるサイズでいいのです。今は親を介護中とか、育児中という方もいると思います。できる範囲で何か、1分でも輝く時間があり、土や植物に触れることがとても重要だと思っています。

○松下：随分前になりますが、林業の世界ではサンデー林業というのがありました。いわゆるサラリーマンしながら日曜だけ自分の山を手入れするというものなんです。それは森林所有者として仕方なくするのか、好きだからするのかによって全然意味が違うと思うんですけど、そんな生活も含まれているんですね。

○塩見：そうですね。消費者と林家、消費者と農家の間があまりにもなさすぎると思っています。森、里山を配慮できる国民の数をいかに増やすかというのがとても重要です。農を例に言うと、「農業配慮者人口」と呼んでいます。「農業を配慮できる人口」をこの国にいかに増やすかが重要だと思うのです。そういう意味でも、どんぐり銀行と出会い、活動する人、木のおもちゃの空間を求める人の数が増えていくことがとても重要です。

### Ⅲ：会場の参加者からの質問を受けて

○増田：会場のほうからもたくさん質問をいただいていますので、それを踏まえながらまたお答えいただきたいと思います。

まず、里山が今変わってきているという話なんですけども、里山って何なんだと。定義といますか、どういうところを里山と言っているのか。どうなればいいのかということをもう少しそれぞれ教えてくれないかという話と、高度経済成長期以前に盛んに使っていたけど使われなくなったと。

じゃ昔の生活に戻れと言っても無理だろう、どうやってこれから使っていったらいいか。点や線ではなく面として使う必要があるだろうという、それでどんなことが考えられるかというような、里山ということに関してご質問がきているんですが。里山という定義というか、里山って何ですか、それをどういうふうにご利用していけばいいんですかというご質問ですが、そのへんをお一人ずつ少し。

○川畑：里山はまさに香川県のような、小さい空間の中に経済が回っている都市があって、そこから近いところに山があって、そこが一緒になって生きているところだと私は思っているんですけれども。

先ほどご質問の中にあったように、要は一度都市部に出てしまったらなかなか自分が育った地域だとかに帰っていくのは難しい。そんな中でどうやって、例えば里山だったら里山、その地域の何かだったら何かを回していくとか、また再生させるかというのは、消費が多いところに持って行って、例えば「香川里山きのこセット」とか、分からないですけど、その産物を持って行って都市部でどんどん消費してもらおう。

でも消費といっても、例えばテレビを爆買いするとかそういうのではなくて、例えば里山きのこセット香川産があつたら、それを都市部がたくさん消費することで、実はその消費したものが里山に返っているという、そういう仕組みが今後は必要なのかなと。もちろん、都市部の人たちがまた自分たちが育った地域に戻って、そこで何か貢献できるというのが一番理想的ですけれども、なかなか現実には、私自身も三重県に戻っているわけじゃないですし、難しい部分もあると思うので、地域の里山のものをどんどん使ってくれる人たちのところに出していく工夫を地域のほうがしていく。それに都市部のほうもしっかり協力していくというような態勢があれば回っていくのかなと思っています。

○増田：塩見さん。里山はお話の中にもありましたけど。

○塩見：私の場合は完全に広義の里山ということになるかと思います。ため池も、民家の蔵も、野道も含みます。かなり広い範囲を私の中では位置付けています。

東日本大震災後にエネルギー問題が出てきました。生活雑貨・アウトドア用品の大型店では、小枝を燃やせばお湯も沸かせるし、小枝を燃やすことで電気にもなり、携帯電話・スマートフォンが充電できるものが6万円ぐらいで売られていて、とてもすてきなと思います。里山の小枝みたいなものがエネルギーになる。そういったものが現代の技術ではできます。そういう身近なものの中に、里山の恵みがエネルギーになっていくこと、新たな価値を生むようなものがいっぱい生まれることはとても重要だと思います。

それから、写真が好きな方は「里山×写真」、短歌がお好きな方は、「里山×短歌」とか、「自分の大好きなこと×里山」、「得意なこと×里山」、「趣味×里山」がいかに関心していくかが大事です。きのこでもいいし、陶芸でも、華道でも何でもいいので、そういったかけ算、組み合わせを一人一人が発見して、自分の方程式を発見して行ってやることが大切だと思います。

木をうまく活かした空間、場所というのは、「居場所」と捉えられるのではないかと思います。劇作家の平田オリザさんは「居場所と出番」といいましたが、よくできたキーワードだと思います。出番があつて、それから居場所がある。その両方を香川の森で、里山でつくっていくことが重要ですね。

○増田：今の時代に合わせた使い方をこれから考えていったらいいだろうと。松下さん。

○松下：定義ってなかなか難しいところがありますが、昔は農が中心の生活だったので、薪だったり畑に使う緑肥だったりという、そういう生活のために使ったような、集落の周辺の林というのが里山だったんだと思います。そういうのがなくなった時にどう里山を考えるのかというお話だと思うんですが、

一方で、今の緑のままではどうして駄目なのかという方もお出でになったりするところがあるところでしょうね。

また、最近増えつつあるようですが、自宅の燃料をもう一度薪に変えてみようというのも一つの選択肢だし、それがお金の面からなのか、おしゃれな生活からなのかは別にして、薪を採ってくる森はその人の里山になるだろうし、例えば山歩きに行く、近くの山を散歩することだけでも、その人の暮らしにとっては山を使うことになるのであれば、私はある意味、今の里山としての使い方でもいいんじゃないかと。

ただ、一般の方にとって里山と言われても距離があるのは、どうしても自分の山を持っていない人が多いので、持っている人は自分の山に行けばいいんでしょうけど、持ってない人たちが、目の前にあるからといってそれが里山かというところ、所有の関係で近づけないところがあります。そういうところは社会的な手法でうまくつなげていければ、現代の人たちが周辺の山を自分たちの里山だと意識するような取組みは可能なんじゃないかなと思うので、そのあたりが今後の展望なり課題じゃないかと思います。

○増田：確かに、昔は燃料として薪を拾う、あるいは落ち葉を堆肥にする、そんなかたちで

使われて、農業をする上で必要な農用林という言い方もあったようですが、それを里山と言ってきたと。それが使われなくなったのが燃料革命や肥料革命ですね。じゃ、昔に戻れるかということ、そうは戻れないだろう。そういう意味では、時代に合った新しい使い方みたいなものを。

ただ一方で言うと、まきストーブなんていうのはまた増えてきているとか、香川県とかではそのまきを生産するようになって、また薪炭林を再生するという取り組みをされている方もおられますので、そういった中で新しい動きで、一つは災害に強いといえますか、荒れない、そういう山を取り戻していきませんか、あるいは人々の、まさに森の恵みといえますか、それを生かすようなところでできないかということですが。

もう一つ、松下さんの説明にあったんですけど、香川の森づくりの課題と展望、それから香川の森のランドデザインについてお話をお聞きしたいというのもあるんですけど、簡単にちょっと、みどり整備課長さんとして。

○松下：私が言っているのかどうか分かりませんが、他の県と違うところは森がコンパクトに周りにあるということだと思うのと、大規模な林業政策というのはちょっと香川県では難しいということがありますから、やはり自分たちの地域の中でどう自分たちの森をうまく使っていくかということコンセプトを考えていく。

先ほど言ったように、雑木林がこんなに多くなっているということがありますが、かといって全部燃料に使うわけにもいかないんだから、それこそ、みどりの宣言をした中にも入っていましたし、みどりの基本計画の中にも入っていますが、どうにかたちでもいいので、みどりを自分たちの暮らしを豊かにするために使っていこうということを考えてほしいんじゃないか。

だから、たまに土日はぼけっと一日過ごして帰るだけでも私は森の使い方だと思うので、いかようにでも森を、自分の暮らしを豊かにするために幅広く森を使うことを考えていくというやり方をどんどんしていけばいいと思います。

また、森林所有者の問題と森を持ってない人の問題があります。森林所有者にとっては所有が負担にならないような森の利用の仕方をいかに用意できるか、森を持ってない方には、森の恵みにいかにアクセスできるように持っていけるかというところを、行政的な意味合いで今後検討していければ、それこそみんなの森になっていくんじゃないか。香川県は狭いからこそ、みんなの森になるんじゃないかなという期待は持っています。

○増田：今日始まる前にスタッフの方とか企画された方が、四国というと、東京から見ると一つに見えてしまう。でも、高知、徳島、愛媛の3県は林業県ですね。香川県は林業県じゃないって松下さんからお話があった。確かにそのとおりで、他の三つの県に比べて、林業で競争しても、勝てるかといったら勝てないだろうと思うんです。

ただ、そういう香川でもヒノキ林があるという。これはやっぱり使っていきたいということで、製材所もできたということで、これから動き出すんですかね。そういうものをいかに香川県民が使っていけるかということじゃないかと思うんですけども。それも、水源涵養と





か土砂災害防止とか、環境問題がありますので、山が荒れないように。

香川県にも 900 メートルを超す大滝山とかがあります。そこにはブナ林があって、東北地方の山と一緒にですから、そういう自然林は自然林として守る。ちょっと下りてきた里のまさに里山では、ヒノキ林もあるし、あるいは広葉樹林もあるんですけど、そこが荒れないようにうまく使っていくことを県民全体で考えていったらどうかなと思うんですけども。

それから、香川県の平地はかつてはマツ林だったんですね。ところが今はなくなってきていまして、こういうご質問です。高速道路を車で走っているとマツ枯れが大変目につくと。他府県から来る人には、香川の緑は大変だ、大荒れだと思われるので、マツ枯れ対策は何か実施されていますかと。私もちょっと関わっているんですけど、松下さんからちょっと。  
○松下：最近マツ枯れをそれほど気にしたことはないんですね。マツはほとんどなくなってきていて、これだけ広葉樹が繁茂した中でマツは更新しませんから、やはり枯れるのを防ぐよりかは、そういうところはもう広葉樹に転換したほうがいいと思っています。

ただし、マツが生えているところで、観光地なり、重要なところを絞って守っていくというのは今もやっています。見苦しいものについての対策は必要かもわかりませんが、それ以外は、あえてもう一度そこにマツを戻すというところまではしなくていいのじゃないかなと思います。ただ見苦しいところは言っていたら、できるだけいろんなかたちで対応はしていきたいと思っています。

○増田：すみません、私もちょっと関わっていて、県で松くい虫防除をやっています。非常に景観的に重要なところ、あるいは土砂災害で危険なところ、ごく限られた箇所になってきましたけども、松くい虫防除をやっています。ただ、薬剤を使うことに対する抵抗といいますか反対もおられて、減ってきていますけど。どんどんマツが減ってきましたので、やるところがなくなってきたみたいなのところもあるんです。

ただここに書かれたように、目立つ。実は今年も目立ちます。峰山あたりでも赤い木が見えるんですけど、残っていたマツが枯れていっているんですね。松くい虫というのは、カミキリムシが5月か6月ごろ出てきて枝をかんで、8月ごろ弱った木に卵を産みつけて、それが冬を越して出てくる。

昔もいたんですね。津田の松原でおじいさんと話している時にこんな話を聞きました。昔は赤くなったマツはすぐ切っていたんですねって私が言ったら、80（歳）ぐらいのご老人に先生の認識は違うと、早く赤くなれとお祈りしていたんだと。要するに、燃料が欲しい、だけど津田の松原のマツは切れない、うちに燃料がない、赤くなったら切れる、はよ赤くなれ、と。だから、何本か枯れていたというんですね。

ところが今は赤くなっても切らない。そうすると、冬を越して夏まで置いておくと、カミキリがどんどん出ると。じゃ、今、マツの木をどんどん切ることができるかという、ごみとして処分するには金がかかるんですね。燃料で使えないみたいなところもあって。

そういう意味では、守るべきマツはしっかり防除して、できないところは広葉樹林に戻って貰おうとか、あるいは元気なうちに切って、材にして売って、樹種転換と言いますが、マツ林を他の木の林に替えていくみたいな、そういうことも考えていったらどうかというような話をしているんですが、そのくらいにさせていただきます。

それから、さっき聞いたんですけど川畑さんに、国産材を一般の方に広く知ってもらうように行っている活動はありませんか。それから、知らないうちに外材や安いものを、違法な木材を使っている人が結構いるんじゃないか。それから、国産材の良さを知ってもらうことをお聞かせください、アイデアも含めて。国産材だから使えという話じゃなくて、結果的に国産材を使っているいいなと思ってもらえるような、そういうアイデアとか方法だと思うんですが、もう一度。

○川畑：企業で例えば店舗をたくさん出しているところとか、ホテルを経営しているところとか、そういう割と大きな面積のレストランだとか空間をつくっている会社のデザイナーさんとかそういう方々というのは、デザインが先なので、それを実現できる材料を選ぶ。

または、デザイン等に特にこだわりがない場合は、カタログと値段から材料を選んでいたので、それが国産材であるとか外材であるとかというのは、先ほどのご質問にあったように、全く関係ないわけですね。特に意識してなかったというのがほとんどなんですね。

そこに実は、それを特に意識してないうちに選んでいたのであれば、じゃ国産材はどうですかという。どうですかというか、国産材に切り替えませんか、国産材を選びませんか、国産材でもお客さまが望むようなデザインだとか商品に私たちがします。

それが商品というかたちだけではなくて、そこに何か、例えばその会社の社長がどこかの県出身だったら、その県産材を使いませんかとか、例えばその会社がどこかの都道府県と

何かを組んで一緒に仕事をしたのであれば、じゃ、その県産材を使って、その地域にさらに貢献できるようなこういった商品と一緒に作れそうですとか、そういう提案をしながら、その会社にも使ってよかったって、自分たちも貢献しているんだ、というようなご提案の仕方です。

○増田：ありがとうございます。

それから、やっぱり香川ですね。どんぐり銀行について質問がたくさん来ています。ご説明があったんですけど、どんぐり銀行は他府県から送ることはできないのでしょうか。あるいは、どんぐり銀行の窓口は各市町村に設けられていますか、身近なところで預けられるともっといいのですがという。どんぐり銀行のどこから預けるということですけど。

○松下：どんぐり銀行をやり始めた頃には全国からどんぐりが送られて来ていたんですが、基本的には県内を対象にやっています。一時、生物多様性の関係で遺伝子攪乱になるという批判を受けたこともあって、ちょっとデリケートになっていますが、子どもたちの夢はつぶしたくないということで、以前は県外から送ってきても通帳は発行していました。

だから逆に、他のところでどんぐり銀行をやってみたいという時には、ぜひどんぐりやったださいよと言っていたのはそういうこともあるので。最近では地域の木は地域の種子でつくろうということが定着していますので、それだったらいろんなところでやってくれたらいいと、どんどん地元でやったださいということです。それで基本的には香川県内ということですが、夢をつなぐという意味でお断りは基本的にはしていないという程度です。

市町村で受け付けをやってもらうというのは、実は仕事の中でそれをやってもらうのはなかなか大変なところがあって実現していません。県の出先も含めた4カ所、5カ所ぐらいしかやれてないので、それはいつも大きな課題です。今年からまた1、2年は臨時支店ということで、不定期ですけど県内各地に出て行って窓口を用意するというのが幅広く受け入れる今のところの対策になっています。

○増田：DBポイントとは何なのか。どんぐりバンクですかね、どんぐりバンクポイントですか。

○松下：そうですね。最初はどんぐり銀行なのでDポイントにしようと思ったら、ある会社がDポイントをやっている、じゃ、どんぐり銀行の「ど」のD0ポイントにしようかと思ったら、D0ポイントもあるんですね。ネットで調べたらD0チケット、D0コイン、D0マネー、Dマネーなどなど、ほとんど全部あって、唯一DBというのがデータベースぐらいしかなくて、名称がダブらないということでDBポイントにしています。「どんぐり銀行ポイント」ということですね。

○増田：それから、認定行事が少ないような気がする。あるいは、高齢化社会になってきて、もうちょっと参加する人、恵みを受ける人を増やすような工夫はないか。そういう、今後の

展望みたいなところですか。

○松下：それは課題で、いつでもいろんな人が参加できるようにというのがコンセプトですので、こんなことをしてほしいとか、あんなことができるということであれば、ぜひ一緒にやっていただけたらと思います。

○増田：県民の皆さんからそちらへ、みどり整備課というか、どんぐり銀行の事務局のほうにどんどん注文したらいいわけですね。

○松下：そうですね。ぜひその時は一緒にやっていただけたらと思います。

○増田：それから最後に、どんぐり銀行にぜひ子どもと参加したいと思います、職員の方は大変ではありませんか、頑張ってください、応援ですという声もいただいておりますので、ぜひ頑張ってくださいと思います。

#### IV : まとめ

○増田：まだまだご質問・ご意見があると思いますけれども時間がございますので、このへんでパネリストの方、一人 3 分程度でまとめをしていただければと思いますのでよろしくお願いいたします。川畑さんから。

○川畑：私は起業して 8 年目になるんですけども、本当に最初は、田部井さんがビデオメッセージで、でもでもでもって、いろんなできないことの理由が並べられることが多かったとおっしゃっていましたが、レベルは全然違うんですけども、私も起業した当初は、でもできない、でも何とかということは、いろんな地域の木材の加工に関わる方に言われ続けて、それでもお願いし続けると結局全部できてきたんですね。

最初はできないって言われたこともほとんどのところでできてきて、それは時間もかかりましたし、いろいろ闘いもありましたけどできてきて、それで実績も、いろんなところに国産で納めさせていただいていたので、こういうことをずっと続けていって、例えば里山も含め、私は本当に例えば香川の里山きのこセットとかがあったら東京で買いたいなと思ったんですけども、そういうふうに、もっと地域の隠れた宝物みたいなそういうものをどんどん都市部で消費して、それを地域に還元できるような仕組みをつくっていったらなと思っております。

○増田：塩見さん、お願いします。

○塩見：私は 20 代のころにどんぐり銀行の新聞記事を切り抜いていて、とても素敵な試みだと思っていました。今日こうやってそれを推進されてこられた松下さんとご一緒させていただけたこと、ありがたく、そしてすごく不思議に思っています。

それから、川畑さんが手がけてこられた木は、スープ専門店「スープストックトーキョー」の内装にも活かされていて、兵庫などのお店に行ったとき、いいなと思っておりました。こちらもご縁を感じています。松下さん、川畑さん、お二人の作品、されてきたことに今日触れ、やはり 10 年、20 年、30 年と、活動をこつこつ続けていくことが大事だとあらためて感じました。松下さんが発表のなかで、ご自分のどんぐり銀行の歴史を分析をされておりましたが、そこからも学ぶものがありました。

今、私はいま、福知山公立大学の授業で 1 年生向けの「農林業、農村振興論」という授業を受け持っています。林業をどうしていくか、農業をどうしていくか、農村をどうしていくかというのはなかなかとらえどころのない大きな問題ですが、その中の重要なキーワードの 1 つは、デザインだと考えています。デザインというものがとても重要な役割を果たす。今日のお話でいうと、川畑さんはデザインといえるかもしれません。それから教育。松

## 森は自分たちの暮らしの裏返し

下さんのどんぐり銀行は教育です。それに加え、さらにもう一つ、第3のキーワードは何か、それをどう出していくかというのが大事なんじゃないかなと今回は思いました。今日は貴重な機会をありがとうございました。

○松下：パンフレットにも書いたんですが、自分の体験でも、森というのはなかなか変わらないものだろうと、自然って人の手の届かないようなものだろうと思っていたんですね。しかし松くい虫でガラッと森の姿が変わった、すなわち人の暮らし方が変わっただけでこれだけ大胆に森が変わっちゃった経験をしてしまうと、私たちはともすると、こういう森づくりをしよう、将来こういう森が欲しいよねという議論をしますが、ひょっとするとそれって、「そういう森になるように自分たちの暮らしをどういうふうにしたらいんだろう」というふうに裏返しで考えたほうがいいんじゃないかって思うんですね。

そういう意味では、今皆さんが「日常の中でどう森と関われるか」って考えることがたぶん、将来どんな森をつくるかということにつながるんだろうと思います。先ほど知事から宣言をしていただきましたが、その最後に私のみどり暮らし宣言というのがありますので、ぜひ、自分の暮らしの中で何か森と関わることをやってみようということを宣言してもらいたいし、実践していただきたいなと思っています。

○増田：ありがとうございました。森の恵みを生かす暮らしということで話題提供いただきました。それから討論いただきまして、非常に参考になったと思います。

それから、コーディネーターをやっている役得というわけではないですけども、暮らしの中の緑と言いますと、街の緑、都市緑化というのも結構大きな意味があるかなと私自身は考えています。里山とはちょっと離れるんですけども。ただ、今日の話題じゃないですけど、街の緑はどうかなって。やっぱりかなりいろいろ問題もあると。

一つ、私が関わりました事例で言いますと、街路樹で緑を大きくしたいと、でも剪定をバサバサとされてしまうと、これでいいのかという話があるんですが、場所によると思うんですね。枝が張ったら困るところもあるし、十分大きな100年、200年の木に育ってくれてもいいところもあるんですが、それぞれの置かれた場所によって、公園でも家庭の緑でも一緒だと思うんですけども、大きくできるところ、できないところ、適材適所ってありますけども。

街路樹についても両方から相談を受けるんですね。あそこの街路樹を切った、切られたというのと、あそこは邪魔だから切れと、こういう話があるんですけども、どっちも言い分があるといいですか。妨害になるところは切らざるを得ないんですね。でも切って処分してしまうと、切って命を殺したことになるんですけど、切らなければしょうがないところも出てくると。その材を利用するというのを考えたらどうかなと。私は、街路樹林業をやりまし

ようという話を。

ここではこれだけ大きくできるけども、これ以上大きくなったら伐採して収穫して何かに使いましょう、若い新しい木を植えたらどうでしょうかと。大きくできる場所は100年、200年、何百年も育ててもらったらいいでしょうと。そういうのは、都市緑化でもいろいろ考えて緑を育てていったらどうかというようなことも。ちょっと今日の話とそれですけど、暮らしの中に緑を生かすということで、山の緑、都市の緑、家庭の緑、いろいろと我々はその恵みを生かしていく暮らしをしていけたらいいなと思います。

すみません、まとまりにはなりませんけれども、今日の話提供いただきましたこと、あるいはディスカッションしていただきましたことを参考にさせていただきました、皆さまのこれから日々の暮らしをまたもう一回考えて見直していただく、あるいは森の恵みを生かす暮らしを考えていただく。

さらにそれをご近所といいますか、広げていただく。その輪を広げていただくということにつなげていただければ幸いですし、田部井さんの書かれたこれ（プログラム冊子に寄せたメッセージ）ですね、このシンポジウムで改めて、里山の恵み、日本の山の美しさは世界に誇る遺産であると、そういうことを確認していただければと思います。

どうもパネリストの皆さん、ありがとうございました。それから、会場の皆さんもご協力ありがとうございました。（拍手）

以上